

群 教 セ	F09 - 01
	平17.225集

# 不登校児の登校を促す校内支援の 活性化を図る学校風土づくり

- 問題解決のための効率的なチーム支援の工夫を通して -

長期研修員 新井 奈緒子

## ( 研究の概要 )

小学校で、不登校児の登校を促す効率的な校内支援の工夫として、支援者同士で支援策を話し合いやすいように話し合いのポイントや話し合う内容を明確化した支援シートを実践を基に開発する。支援シートを生かして効率的に問題解決に取り組む研修会を行い、実践につなげる中での学びから、校内支援の活性化を図る学校風土づくりのモデルを提言する。研究協力校では問題解決に向けて取り組む協働意識の高まりや実践での効果がみられた。

**キーワード** 【教育相談 チーム支援 効率的 問題解決思考 学校風土づくり】

## 主題設定の理由

不登校児への対応に当たっては、学校生活への適応を図ることと同時に子どもの自立をいかに促すかが大切である。しかし、不登校児へのより望ましい登校刺激の与え方や保護者との対応の仕方等は、個々のケースで異なり多種多様であるため、担任としての悩みは大きく、悩みを抱え込んでしまったり、消極的な取組になったりしがちである。このことが、不登校問題を解決することを難しくしている要因の一つともいえる。

近年、不登校対策として、チーム支援など、組織的な支援の方法について、様々な先行研究が行われその有効性が報告されている。現場でもそのような支援の方法を取り入れていこうとする動きがあり、効率良く組織的に学校現場で機能していく支援体制について考えていくことが必要となる。なぜなら、校内の支援体制を「だれが立ち上げるか」「どのように行えばいいのか」という入口となる部分の弱さや校内支援への教職員の研修不足や理解不足から、実践するまでに至らない、という課題があるからである。

学校には不登校問題に取り組む際に力となれる人材がいる。この人材が組織的に協力して不登校対策に取り組めば、効果は大きいはずである。しかし、学級担任は自分の学級があるため、他学級の問題にかかわっていくことは精神的にも、物理的、時間的にも困難さを伴う場合が多い。

今回、教育相談部と学年集団を中心に不登校児

への支援を行う小学校で、研究する機会を得た。現場で求められる支援体制は、不登校の問題解決に向けて、何をどのように話し合い、だれがどのように行動するか役割分担が明確で、迅速かつ臨機応変に対処できる、機動力のある活動組織である。そのためには、対象となる不登校児の状態や情報を的確に把握し、話し合う内容を明確化してより良い支援策を検討し実践に移すための研修やコーディネーターの育成が必要となる。研修で教職員が学び、実践でコーディネーターが効率良く支援体制を運営できれば、支援会議でより望ましい支援策が考えられ、実践での効果的な支援にもつながり、意義深い。

本研究では校内支援の活性化を図るために、まずチーム支援実践からの学びを基に、教職員が協力して問題解決に向けて取り組みやすい方策を考える。そして、それを生かした研修や実践を通してより良い校内支援体制を構築していく。このような流れの中で、問題解決に向けて素速く対処できる学校風土ができれば、不登校問題解決につながると考え、本主題を設定した。

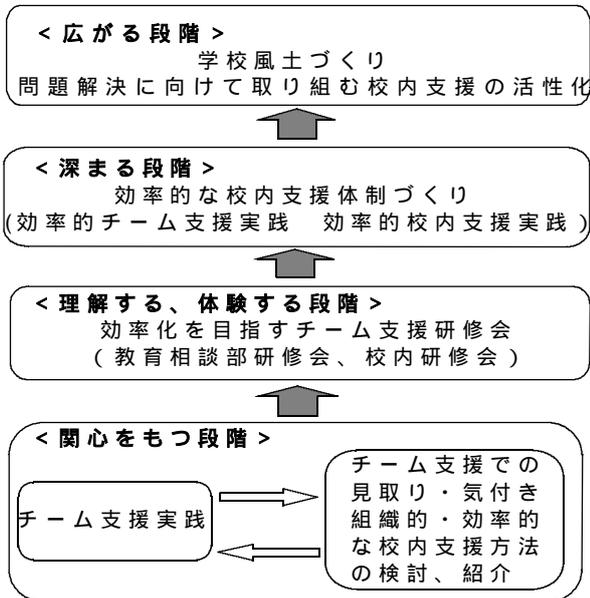
## 研究のねらい

小学校という研究の場で、不登校児への効率的な支援を行うための研修や実践、校内支援体制の構築を通して、不登校問題解決に向けた校内支援の活性化を図る学校風土づくりができることを明らかにする。

## 研究計画

### 1 全体構想

図1 全体構想図



### 2 研究推進計画

表1 研究推進計画表

月	具体的な内容等
4月	文献研究、支援体制について学校との話し合い・課題発見、チーム支援・チーム支援会議に参加、支援シート作り
5～7月	チーム支援・チーム支援会議に参加、支援シート作り、チーム支援の実践、教職員実態把握アンケート
8～11月	チーム支援・チーム支援会議に参加、教育相談部会及び校内研修会で校内支援研修を実施、教職員アンケート、効率的な校内支援の実践、校内支援体制づくり
12月	研究の検証及びまとめ

#### 研究の内容と方法

#### 1 不登校児の登校を促す校内支援の活性化を図る学校風土

「学校が、問題解決に向けて組織的に素速く支援体制をつくり、より効率的効果的な校内支援ができるようになること」が目指す学校風土である。

その方策として、下記の～を学校で行う。

校内支援方法の紹介、実態把握アンケートなどを通して、校内支援への関心を高める。

研修会は、「支援体制の立ち上げ場面から実践に移す場面へ」という2段階(ア イ)で行い、校内支援体制づくりにつなげやすくする。

ア 教育相談部研修会(教育相談部員)  
事例を基にした支援体制の立ち上げ、メンバーの決定、全体的な支援策の検討、コーディネーター養成を兼ねる

イ 校内研修会(全職員)  
全体的な支援策の理解(アでの演習結果を基に考え方を理解)、具体的な支援策の検討、事例はアと同じ

チーム支援研修や実践を通して校内支援体制を構築し、校内支援の活性化を図る中で、効率的に問題解決に取り組む学校風土をつくる。

#### 2 効率的なチーム支援

チーム支援は複数の支援者が共通理解の基で役割分担しながら対象の支援に当たることをいう。効率的なチーム支援とは、問題解決に向けて、迅速かつ臨機応変に必要な人材が決まり支援体制を立ち上げ、話合いのポイントを明確化し、より望ましい支援策を考える。そして、だれが何をするか役割分担が明瞭で、即実践に移れることである。その方策として、下記の～を行う。

チーム支援会議に参加し下記の点に留意した支援シートを作り、研修会や実践に生かす。

支援者全員で共通理解を図り、支援の方向性や役割分担が分かりやすいもの  
話合いのポイントや話合いに必要な要因を分かりやすく示し、演習や実践を通して問題解決思考を身に付けられるもの

問題解決に向けて、学校が迅速に必要な人材を集め支援体制を立ち上げる。

立ち上げた支援体制は支援シートを基に実態把握や支援策の検討を行い、実践に移る。

必要に応じて振り返りを基に支援策や支援体制を支援者間で検討し直し実践する。

#### 3 研究全体の流れ

図1の全体構想図及び表1の研究推進計画に基づく「研究全体の流れ」は下記のとおりである。

##### (1) 関心をもつ段階(実態把握、準備など)

研究協力校の校内支援について話し合いを基に実態把握を行い、課題を発見する。

チーム支援会議での学びや気付きを基に支援シートの開発や改善を行う。

教職員には、支援方法の紹介や実態把握アンケートなどを行い、校内支援への意識付けを図る。

### 支援シートについて

支援シートを作成し、活用を通して効率的な問題解決に向けての考え方や方法を身に付けられるように、3段階（表2参照）から構成する。

表2 支援シートの段階と内容及び養う力

段階	支援シート	内容及び養う力
1	～	対象の問題及び実態把握等を行う。情報収集の視点や能力を養う。
2		第1段階で得た情報を基に全体的支援策を検討する。分析力と総合的に考え判断する力を養う。
3		第2段階の全体的支援策を基に具体的支援策を考え実践に移す。支援策を具体化し実践につなぐ力を養う。

第1段階では、次の観点から情報を収集する。

支援シートでは、対象の問題に注目し、「対象の問題は何か、現在どんな状態であるか、対象と周りとのつながりはどうか」などを記入する。また支援シートでは、対象を多面的に理解するために様々な視点から具体的な内容を記入する。支援シートとは、分かったところから効率的に記入できるようにどちらから記入しても良い。

支援シート（小澤美代子 2004を参考にして作成した表、表3参照）は、不登校を5つの段階に分けて考えたとき、支援シートとを基に、対象がどの段階であるかを検討し支援を考える際のめやすに利用する。担任または支援会議の中で検討する。

表3 支援シート の一部抜粋表

段階チェック表 どんな支援がその子に必要なか考えるめやすにしよう			
	現在の状況に近いものに	具体的な様子や状態	支援のポイント（支援会議の際に具体策を考えよう）
不登校	登校渋り	友達がいない。一人であることが多い。	子どもの孤立感を緩和させるようにする。
	日常生活が苦しくなり始めている。遅刻や欠席などの形には現れていない。	元気がなく表情が暗い。保健室に通ったりする。いつもと何かが違うところなどが感じられる。など	何でも話せる学級の雰囲気づくりや個々の人間関係づくりをする。
初期	遅刻欠席の始まり。	腹痛、頭痛、発熱等で休むことがある。	休息と安眠を心掛け安定させる。

第2段階では、第1段階で得た各情報を対象の全体像把握のための要因として支援シート（表4参照）に分類整理し、支援策を考えていく。

まず、各要因は対象の支援を考える際の資源と

とらえ、「対象」と「対象の周り」に分類する。さらに対象の問題を解決するための+の資源となりそうなものは+要因、逆は-要因というように細かく分類し、対象の状態や状況をよりきめ細かく多面的に把握する。資源は付箋に記入し、分類できないものや+-の区別が付かないものは、その時点で一番あてはまる箇所に貼っておき、対象の変容に応じて移動させる。

次に各要因をみて、どんな支援が必要か、どの資源を利用してどんな支援が考えられるか、全体的（長期的）支援策をいろいろと考え検討していく。さらに、「支援を実行しやすいか」「支援を行って効果や必要性があるか」という2観点からみて、実行しやすく効果などが大きそうなものから具体的な支援を考え実行に移すめやすにする。

表4 支援シート の記入内容項目表

	対象	対象の+要因	対象の-要因
対象の周り		を記入	を記入
対象の周りの-要因を記入		各要因を基に全体的支援策を検討したら、実行しやすさや効果を考慮して記入	
対象の周りの+要因を記入			

第3段階の支援シート（表5参照）では、支援シートで考えた全体的支援策を基に具体的（短期的）支援策を考える。支援者同士の共通理解を図るため、共通目標を考えて「いつ、どこで、だれが、どんなことを」という具体的支援策を検討し記入する。次回の支援会議を1～4週間後をめやすに設定すると、実践の見通しがもちやすい。

表5 支援シート の記入内容項目表

( )の支援シート				
月日( )の実態	実施期間		月日～月日	
共通支援目標				
	支援内容	支援者	現状or変化	考察
対象への支援 対象の周りへの支援・働きかけ				
振り返り				

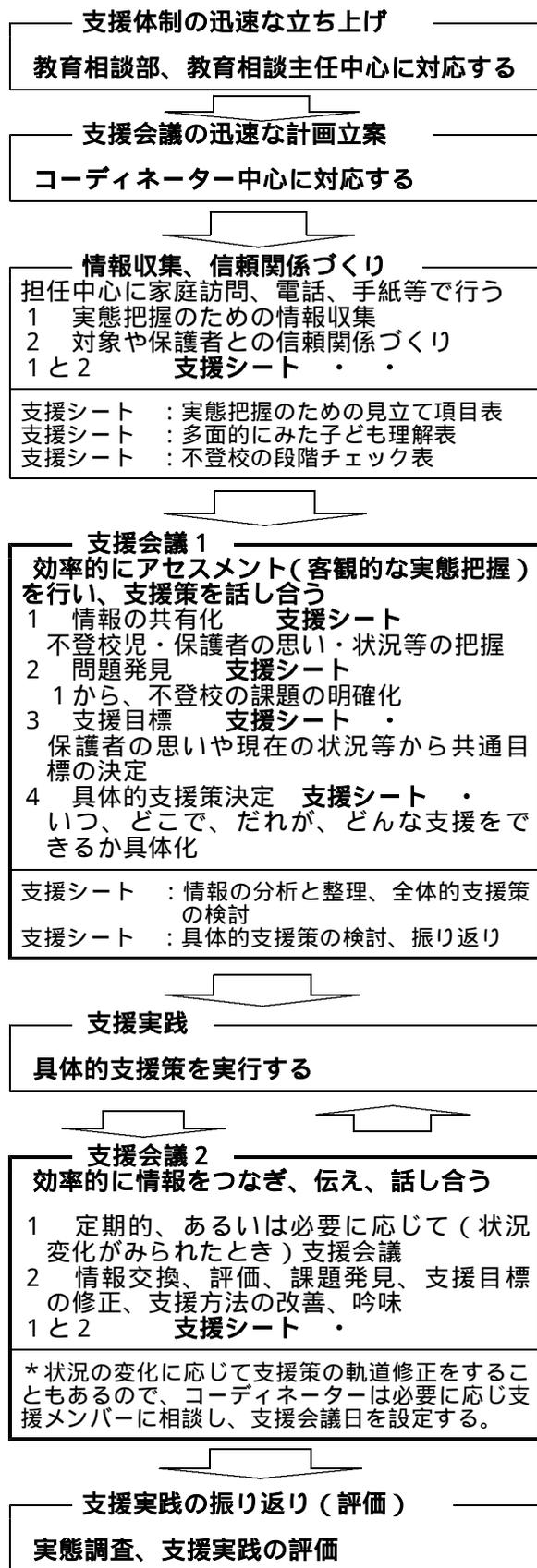
### (2) 理解する、体験する段階

効率的な校内支援を行うための方法と工夫を研修会で伝え、演習を通して理解を図る。

### (3) 深まる段階

(2)の研修を通して、次頁図2の校内支援体制づくりにつなげる。

図2 校内支援体制



実践の概要

1 実態把握から校内支援研修及び実践への流れ

4月の協力校との話し合いでは、支援体制の窓口の弱さが課題としてあげられた。7月に協力校教職員に行った教育相談の実態調査結果では、児童の問題解決に支援体制の必要性を感じている教職員は91%と多かった。しかし、支援体制について詳しく知っていた人は、13%にすぎなかった。このため、教職員の実態に合った校内支援に関する研修を行い、実践につなげる必要があると考えた。

そこでまず、教育相談活動の中心となって活動している教育相談部会で、支援体制の立ち上げ場面や支援策の話し合い方法の研修を演習で行った。次に、校内研修会で支援策を考える支援会議の演習を行った。この2つの研修会を通して、校内支援体制づくりにつなげられるようにした。

実践と研修、感想などは以下のとおりである。

(1) チーム支援実践からの学びや気づき

協力校である小学校で、4月からチーム支援を、不登校児3名(A B C)について立ち上げた。そして、試作段階の支援シートを用いて支援会議等に参加し、そこでの学びや気づきを、その後の実践や支援シートの開発と改善に生かした。

ア 事例A B Cの支援会議からの学びや気づき  
Aは約1年半不登校であった。4月当初から担任中心に家庭訪問などで家庭との信頼関係をつくりAへの再登校を促した。5月にAが再登校を開始した時点で、学校全体の支援が必要であると支援会議で判断した。全職員の支援方法(言葉掛けなど)について、担任から話をしてもらい職員会議で共通理解が図られたので、職員が協力しやすかったようだ。Aのチーム支援会議での担任の考えや振り返りを基に支援シートの内容項目を検討したが、+の資源や-の資源を意識することが必要と感じた。なぜなら、対象や対象の周りの資源(要因)を細かく把握し、-面を+面に変換できるような支援をしていくことが、後々学級に適応させる際に重要になったからである。資源が徐々に増えていくので、支援シート記入時に付箋を使うと、付け足しや移動などが可能になった。また、保護者との信頼関係を築くことやAとの関係づくりでAの好きなもの(アイテム)を知り会話をつなげたり、できることで自信をもたせたりする支援も大切であった。再登校後も、Aへの支援が継続し元気に学校に登校している。

(4) 広がる段階

研修を生かした支援実践や校内支援体制づくりを通して目指す学校風土の構築につなげる。

Bは約半年間不登校であった。Bへの支援では、支援会議はメンバー全員が集まなくても支援シートを基に、中心メンバーで支援の方向性を話し合い、ほかの支援者に情報をつなげられたので一貫した支援ができた。支援メンバーとして母親、友達、友達の母親が入ったときは、担任がつなぎ役になりながら、支援会議の共通目標を達成するようにしていくと効果が大きいことも分かった。Bが家から出られない状態でも、保護者と信頼関係を築くことに心掛け、友達からBへのメッセージ等を少しずつ伝えていくことが後々の友達関係づくりに良い影響を与えることが分かり、簡単なメモを付箋に書き支援シートの資源のところなどに貼っておくことが大切だと感じた。また、再登校した際には、支援シートをみながら、対象や学級との全体的バランスをチェックし、担任が不登校児と保護者だけに振り回されないように、支援策を考えていくことも必要と感じた。友達からの働きかけもあり、9月には学校に登校できた。

Cの場合は、不登校期間が約2年と長いと、保護者の信頼を得ることを通して、Cの精神的安定の様子をみながら、Cの好きなものをチェックしそれを通して担任と会えるようになることを目指し、何回か担任が会うことができた。CやCの周りの資源を細かくチェックし担任の思いを大切にしながら、少しずつ学校に近づけるように、支援策を考えることが効果的であった。Cは次年度からは学校に登校したいという思いがあるので、チーム支援会議ごとに資源の増減や変化もあるが、短期的な支援だけでなく、引き継ぎを考え次年度までの長期的な支援策も視野に入れていくことが大切であると感じた。

#### イ 考察

チーム支援実践では、上記児童の変容からも分かるとおりの効果が出てきた。話合いの際に、一つの情報に対象への自助資源や援助資源という見方からとらえ直すことにより、それを使ってこれまで考えられなかった支援策を考えることができた点が良かった。効率的な話合いをするには、対象の内部資源や外部資源を的確にとらえ、それらを基に支援策を考えていく、問題解決思考を教職員が身に付けることが必要であると感じた。また、記録を基に支援方法を見直したり、思考過程を身に付けたりするために支援シートを用いたが、話合いのポイントを焦点化し話合いの内容を深めるためにも、有意義であった。

#### (2) 教育相談部会でのチーム支援研修

実施日：平成17年8月26日（金）

参加者：教育相談部員6人、養護教諭、校長  
ア テーマ

事例の児童に対して、どんな支援メンバーや支援が必要か考え、検討する

イ 展開（時間：40分）

時間等	研修内容
説明 5分	・チーム支援の立ち上げ場面の研修であることを知る。
演習 30分	演習1 支援メンバー決め
	演習2（支援シートを使用） 情報収集から実態把握
	演習3（支援シートを使用） 全体的な支援策の検討
まとめ 5分	・全体的支援策を基に、具体的支援策について話し合うことを知る。

#### ウ 教育相談部研修会後の感想

「いろいろな要因を組み合わせ、手だてを考えればいいということが分かった」「一人よりは複数で話し合うと、多面的にみえてくる」「難易度や必要性で、できる、できない、とか考えて貼ったので、視覚的に分かりやすく頭の中が整理整頓できて良かった」など、情報の分類や支援策をスケールで考えた点が、話し合うポイントになり良かったという感想があった。

#### エ 考察

感想から、全体的な支援策の検討では、実行に移す際に難易度や必要性などで考えることが話合いのポイントとして有効であることが分かった。

#### (3) 支援シートを活用したチーム支援の実践例

ここでは、チーム支援実践ABCの3事例の中の1事例を紹介する。

#### ア 支援シートを活用した事例Bへの支援

支援シートでは、Bの不登校の状態やいつ頃から登校渋りが始まったかなどの共通理解が図られた。Bとのつながりの強い母親が学校とBをつなぐ資源であることがみえてきた。

支援シートでは、様々な面からBについて理解することができた。

支援シートを用いて、Bの状態が支援シートと及び支援会議から不登校中期段階あたりの状態であると話し合われた。支援のポイントは、保護者との信頼関係づくりとBの気持ちを外に向けさせることを支援のめやすにしたことである。

表5の支援シートでは、支援シート～で得た情報を基に4カ所の要因に記入し、支援者同士が共通理解を図りながら、Bに関する全体像を把握することができた。担任がBと会えるようになるための方策として、まず母親との信頼関係づ

くりを通して、外に気持ちを向かせていくことが実行しやすく効果も大きいと話し合われた。

表6の支援シートの活用では、記録を残していくとBの変容や支援の方向性がみえてきたので、次の支援策を話し合う際のめやすにもなった。

表5 支援シートの活用の実際(4月下旬、一部抜粋)

対象や対象の周りの情報収集を行った後、支援内容を検討し、支援の効果や必要度・支援の難易度を考えながら決めよう	
対象の周り + や - の要因	<ul style="list-style-type: none"> <li>+ の要因           <ul style="list-style-type: none"> <li>・算数が得意である。</li> <li>・母親を通して学校の様子を伝えられる など</li> </ul> </li> <li>- の要因           <ul style="list-style-type: none"> <li>・家から出られず担任とも会えない</li> <li>・国語は感情のどらえろが弱い・仲の良い友達がいない</li> <li>・体育には消極的</li> <li>・友達に輪に自分から入れない</li> <li>・算数の問題は解けるが説明はうまくできない など</li> </ul> </li> </ul>
+ の要因	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担任は週2回家庭訪問</li> <li>・母親と担任は会って話ができる</li> <li>・母親はまめな人</li> <li>・「話したい」「会いたい」と思っている友達がいる など</li> </ul>
- の要因	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者は勉強への関心が高い(勉強面で評価する養育)</li> <li>・母は担任が家庭訪問してくることを申し訳ないと思っている</li> <li>・祖母の介護で母が大変</li> <li>・小学3年から登校渋りが始まりそのことで母親は自信がなく不安がある</li> <li>・母はBが遅刻することは気にしていなかった様子</li> <li>・家では嫌なことはさせない</li> <li>・父親の存在感がない など</li> </ul>
支援の効果・必要度	<ul style="list-style-type: none"> <li>効果大</li> <li>効果小</li> <li>時間的にすぐ必要か</li> <li>時間的にすぐ必要でない</li> <li>効果小</li> </ul>
支援の難易度(すぐできるか、支援しやすいか)	<ul style="list-style-type: none"> <li>すぐできる</li> <li>しやすい</li> <li>すぐできない</li> <li>難しい</li> </ul>
保護者との信頼関係づくり(母親の苦労等を認める)	<ul style="list-style-type: none"> <li>友達とかかわることを通して楽しいという感情をもたせる</li> <li>母親を通してBに会えるように働きかける</li> <li>友達を通して学校とつなげる</li> </ul>
父親としての役割づくり	
<p>対象や対象の周りの+ - の要因から、「Bと担任は会えない状態だが母がBと担任とのつなぎ役になってくれる」「週2回の家庭訪問では母親と会って話ができる」「母は介護で大変」が分かる。支援策として、母の苦労等を認め、励ましながら母を支えていくこと、担任と母親の信頼関係を築いていくことが、Bにとっても大切な支援につながると話し合われた。この支援策は、すぐにでき、効果が大きいと考え左上にした。</p>	

表6 支援シートに記入した内容における時系列での変容

実施期間	Bの状態 共通支援目標	支援内容	支援者						各支援期間全体の考察及び振り返り
			担任	D先生	E先生	養護	母親	その他	
4/28 ~ 5/13	4/28不登校：家から出られず担任とは会えない状態 Bと担任が接触をもてるように母親の信頼を得る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭(B)へ学習状況、学級の様子を伝える</li> <li>・父母の願いを聞く、母と親しく話せる存在になる</li> <li>・担任への支援、相談者、アドバイザー</li> </ul>							5/14 母が担任に対して和やかに接するようになった。会えないが、Bが自分の存在を戸の開け閉めの音で担任に伝えているように感じる。
5/28 ~ 6/5	5/28不登校：担任と短時間なら会えるようになった状態 担任は母親やBとの会話、話題を増やす。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担任とBとの信頼関係づくり(できることから)</li> <li>・Bの好きなマンガ本を借りて話題をつくる</li> <li>・家庭(B)へ学習状況、学級の様子を伝える</li> <li>・母の考えを取り入れながらBへの対応策を考えていく</li> <li>・担任への支援、相談者、アドバイザー</li> </ul>							6/6 担任がBからマンガ本を借り接点をもてたのは良かった。話題づくりができれば今後効果的。母にチームに加わってもらおうとより望ましい支援ができる。
7/20 ~ 9/14	7/19夏休みに、学級の子たちとも会えそうな雰囲気の状態 担任が母親に支援策を提案しながら、夏休み中にBが友達や学校にかかわれる状態をつくるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担任とBとの信頼関係づくり(一緒に物作り)</li> <li>・学級の子数人とBを会わせる</li> <li>・母親に支援策を提案し、相談して決めていく</li> <li>・担任への支援、相談者、アドバイザー</li> <li>・友達の心を家庭で支えてもらうようにしてもらう。</li> </ul>						友達	9/15 夏休み突入直後担任を通して友達と会い、その後も友達と家で会って話げできた。9月から再登校が始まり午前中登校し給食を食べて帰宅している状態。

イ 支援シート ~ を活用した学びや気付き  
 支援シートの活用は、主観的になりがちな支援方針に客観的な視点を与えてくれるので、支援シートを基に効率的に話し合うことができた。支援シートは記入することにとらわれず、問題を解決する方法を身に付ける道具として活用していくと使いやすかった。何回か使用するうちに、情報収集の方法や支援策の考え方が分かり、支援シートを使用しなくても、支援シートの内容を支援メンバーで話し合えるようになった。支援シートを活用していくうちに、支援シート ~ の内容を、手際良く直接、支援シートに記入できるようになった。

ウ 考察

支援シートの活用を通して、どこでも必要ときに支援策を話し合える力が付くと分かった。

(4) 校内研修全体会でのチーム支援研修

実施日：平成17年9月26日(月)

参加者：全教職員

ア テーマ

登校渋りのみられる児童に、具体的にどんな支援が必要か考え、検討する

イ 展開(時間：45分)

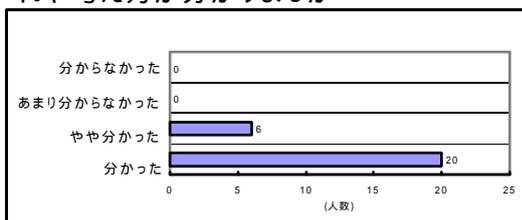
時間等	研修内容
説明 15分	・研修内容やチーム支援の方法等について知る。 ・対象や対象の周りの要因を基に全体的支援について皆で検討後、教育相談部会での研修内容を知る。
演習 発表 25分	演習(支援シートを使用) ・「だれが、いつ、どこで、どんな」という具体的支援策を検討する。 発表・各グループの支援策を聴く。
まとめ 5分	・話し合っただけの支援策の実践や振り返りなどについて知る。

ウ 校内研修会後の教職員アンケート及び感想

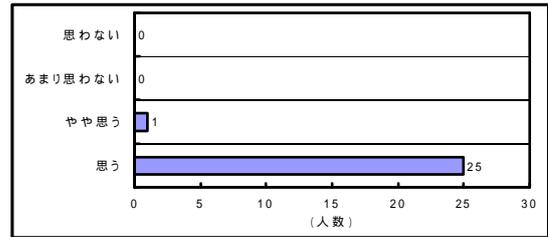
(7) 教職員の校内支援に関するアンケート

図3 アンケート結果(数字は教職員26人中の回答数)

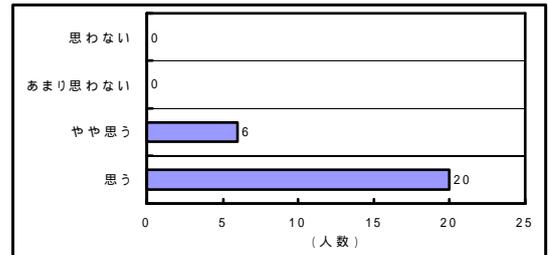
研修会からチーム支援について大まかな流れや考え方が分かりましたか



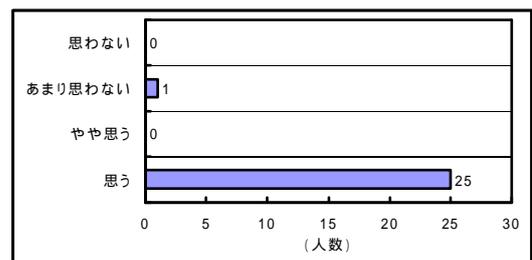
研修で行ったチーム支援はこれからの教育に必要なだと思いますか



機会があれば、研修で行ったチーム支援を実践したいと思いますか



研修で行った効率化を図るチーム支援のための問題解決の方法や考え方は、様々な問題解決に向けて役立つと思いますか



(1) 研修を通しての効率的支援に関する感想  
 具体的手だてがいろいろと考えられ、ためになった。

児童の実態を洗い出して分析することで、新たな課題がみえてくる。チームで考えられることにより、別の角度から課題を見直すこともできる。初めは少しわずらわしい感もあるが、機会があればやってみたいと思う。

話し合うとき、児童のいろいろな要因で考えると実態が分かりやすく、どんな支援が必要か考えたり、話し合ったりしやすい。

解決の糸口を見つけるには良いと思いました。(うちのクラスにもお世話になりたい子がたくさんいます。)

とても似ている子がクラスにいます。今後手だてをしないと登校渋りになるのかなと、心配になりました。前担任に話を聞いたり、本人にも働きかけようと思いました。

## エ 考察

研修時間は45分間であったが、前頁図3の意識調査や「チーム支援ということを知りませんでした、今日分かりやすく教えて頂いて良かったです」などの感想から、満足度の高い研修ができたといえる。実態把握からチーム支援の方法を知らない人が多かったため、実態を考慮した説明や演習を重視した点が有効であったと感じた。

研修会では、支援策を短時間で効率良く検討していたという印象を受けた。問題解決に向けて、何を基にどのように話し合えばいいかという点が明確化されたため、グループごとに短時間に効果的な話し合いがなされたと考えられる。

前頁図3のアンケート結果から、研修を通して、校内支援への協働意識が高まったことが分かる。

## 2 研修会後の研究協力校の変容

### (1) 校内支援の実践例

校内研修会後、登校渋りから欠席が続くようになった児童が出た学級では、教育相談主任が窓口となり、担任、教育相談主任、保護者で話し合いが行われた。児童の実態把握から要因を探り、その問題解決を図ったところ、再び登校できた。状況把握から迅速に問題を解決する方法が見つかったという感想が、支援者同士の振り返りであった。

その後、再び欠席が始まったため、支援体制が必要と感じた担任から、教育相談主任に、校内支援の申し出があった。教育相談主任がコーディネーターとなり、担任の意向を尊重して、支援体制をすぐに立ち上げて問題解決に向けて取り組み、現在は支援が良い方向に進んでいる。「みんなに助けてもらえてありがたかった。引き続き支援をお願いしたい」と担任は感想を述べていた。

### (2) 校内支援体制について

研修会後、教育相談主任を中心に問題状況に応じた迅速な支援体制の立ち上げやチーム支援を行える校内支援体制が機能し、研修を生かした実践に結び付いている。また、実践を通して、学校全体での情報共有化の課題も生じ、その課題解決に向けた話し合いや取組もみられるようになった。

### (3) 考察

研修会を通して自分の学級の課題に気付き、チーム支援実践につながった人が出たことは、研修が実践と結び付いた証といえる。また校内支援を行う意識の高まりが、効率的に機能する校内支援体制構築の一助となったともいえるだろう。

## 実践の学びからの提言

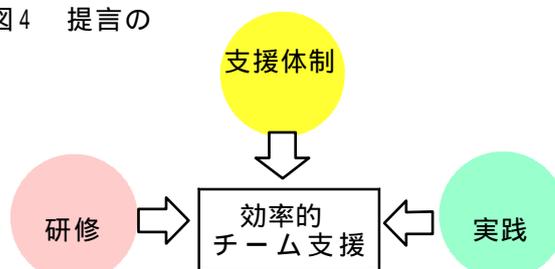
チーム支援は小さな窓口であるが、手だてが具体的であれば導入しやすい。その手だてに効率化を加え、それを利用して支援実践や支援体制の構築、改善を行うと、問題解決に向けて効率良く機能する学校組織をつくりやすくなる。

以上のことから下記の提言を行う。

**提言 校内支援を活性化させる学校風土をつくる研修、実践、支援体制の融合**

チーム支援を窓口に、効率的な校内支援を目指して研修、実践、支援体制が互いに連動して機能し始める。

図4 提言の

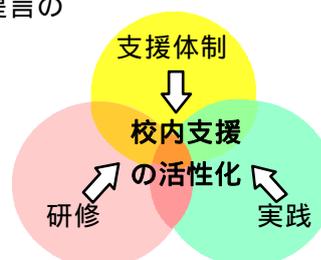


チーム支援研修を通して、問題解決に向けた考え方や方法が分かると、問題解決に取り組む個々の資質が向上する。

研修を全教職員で行うことで、問題解決に向けて取り組む組織の力や協同意識が高まり、機動力のある支援体制づくりや実践につながる。

研修を生かした校内支援体制がつけられ機能し始めると、研修で学んだことが実践と結び付く。そして効率の良い校内支援実践が始まり、研修、実践、支援体制が融合しながら、校内支援が活性化する。

図5 提言の



研修や実践で身に付いた問題解決思考を様々な問題行動の対応に応用すると、問題解決に向けて効率的に取り組む、より機能的な学校組織をつくる。

そして、研修と実践、支援体制の融合が深まり、広がっていくと、個々の力を生かして問題解決に向けて取り組み、校内支援の活性化を促進するより望ましい学校風土が作られる。

図6 提言の

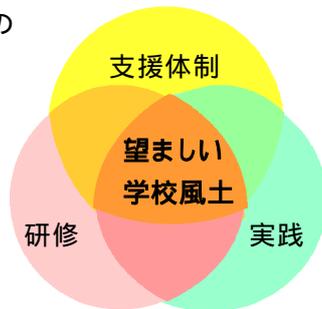
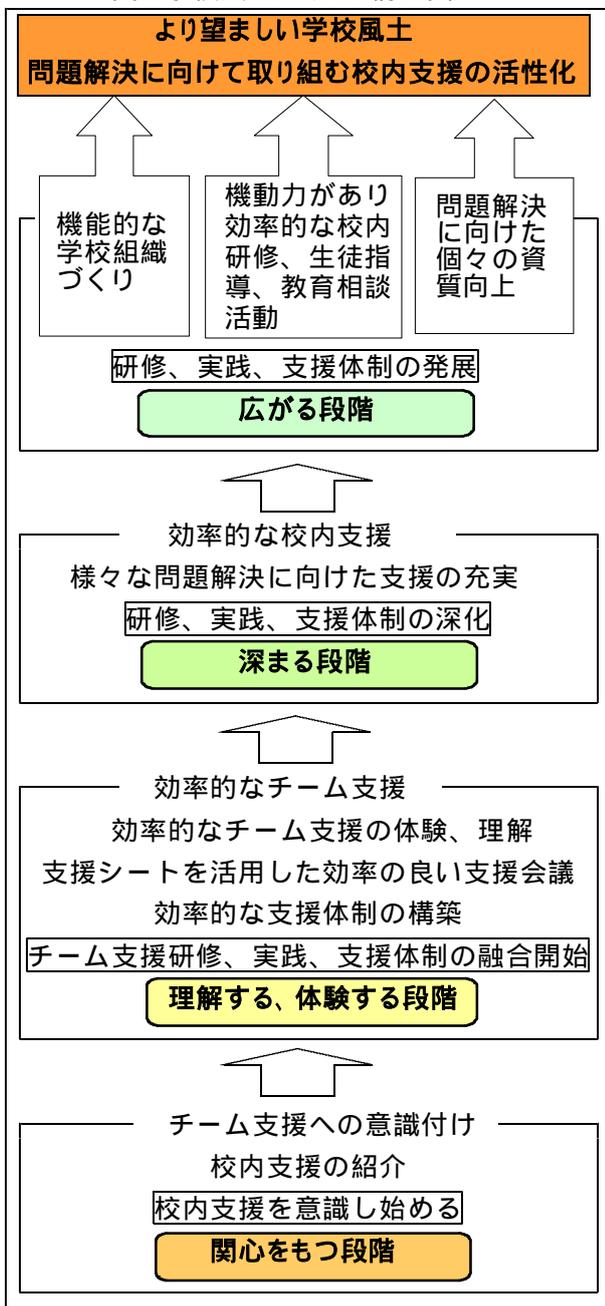


図7 問題解決に向けた校内支援の活性化を図る学校風土づくりの構想図



まとめと今後の課題

1 まとめ

研究の結果、以下のことが分かった。研究協力校では、チーム支援の研修や実践を通して、不登校問題解決に向けての校内支援体制が強化され、目指す学校風土づくりにつながった。教職員の感想やアンケート結果などからは、協力して問題を解決しようとする意識の高まりがみられた。研修会を通して、構築された支援体制の基で実践に結び付くことが分かった。支援シートをチーム支援研修会や実践で活用したが、支援シートを使うと、複数の支援者の共通理解を図りやすいだけでなく、子どもの自助資源を知ること、担任だけでは見えなかった部分がみえてくるので、より望ましい支援策が考えられた。支援会議を重ねることで、支援シートの内容が身に付き話し合いが効率化され実践での効果的支援に結び付いた。問題解決に向けた効率的なチーム支援の工夫を通して、校内支援の活性化につながると考えられる。小学校は学級担任制のため、他学級に参与することが難しい部分があるが、近年、学年解体で行う少人数指導体制などで自分の学級以外の児童へ目を向けられるようになってきた。そのような体制は校内支援体制の構築に活用できる。

2 今後の課題

今後の課題として、以下のことがあげられる。効率的な校内支援の実践を行うためには、実践と並行して、問題解決思考を身に付ける必要がある。そのためには、学校及び児童の実態を考慮した校内支援に関する研修会を必要に応じて行い、支援体制を生かし、実践につなげたい。継続した校内支援を行うために、学年あるいは学校全体で、問題を抱えている児童について情報を共有化する必要がある。校内支援体制や支援方法の見直し改善を行うことが大切である。

主な参考文献

- ・石隈 利紀、田村 節子 著 『チーム支援入門』 図書文化社（2003）
- ・小澤美代子 著 『上手な登校刺激の与え方』 ほんの森出版（2004）

（担当指導主事 住谷 孝明）